

小川 正 著
『「教育人間学の構築」への道
— 上田教育哲学入門① —』

個人出版(1989. 3)

本書は小川正先生のライフワークというべき「教育的真実の探究—『教育の論理の構築』—」という研究のなかから生み出されたものである(本書「まえがき」より)。副題に「上田教育哲学入門」とあるように、本書の内容は、小川先生が師事された上田薫氏のこれまでの著作を、教育学の範囲にとどまらず哲学的な視点から、とりわけ、日本の戦前、1930年代の哲学や文芸評論の成果(具体的には西田幾多郎や三木清、さらには小林秀雄の業績など)とつきあわせながら、上田教育哲学の今日的意義やその射程の広さなどを、描き出すという構成となっている。たいへん斬新で野心的な著書である。

ここで、目次の章立てだけを紹介しておく、プロローグ、第一章、教育理論の根源的変革をめざす上田教育哲学、第二章「動的相対主義の教育哲学」構築の推移、第三章「動的相対主義の教育哲学」についての試論、第四章上田教育哲学の継承、とつづき、最後の第四章には、奥様の小川静代先生(本学文学部教授)の論文(現題名「ウルフの自画像?」)がおさめられている。

紙数が限られているので、わたしの率直な感想を簡単に述べさせてもらって、書評にかえさせていただくことにする。

まず最初に、わたしが本書から学ばなければならなかったことは、小川先生が「上田教育哲学の継承」を言われるとき、そこにはたんに「連続的」とでもいうような継承が問題になっているのではなく、文字どおり主体的な継承が問題にされているということである。そし

てその課題がこの著書の全体を支え、独特の張りつめた緊張感をまさに「動的に」行間にみなぎらせているように、わたしには感じられたのである。そしてこの点を抜きにしては、本書の理解はありえないと思う。

次にこの著書で興味深かったのは、上田哲学と竹内良知先生の「自然主義・人間主義のマルクス主義の哲学」との比較・吟味の箇所(本書89ページ以下)である。実は常識的な観点からすれば、このような検討は、考えられもしないようなことであろう。小川先生ご自身も「私の主観的な想像力を働かせた無謀といってい・・・考察」といわれている。しかし、本来はそのような常識こそ問題とされなければならないと思うし、結論だけをいうならば、こうした検討がなされることでしか、戦後の教育理論をめぐるいわば「不毛な論争」(本書110ページ)を超え出ることができないのではないだろうか。その意味でこの考察はむしろ勇気ある考察として評価されるべきだと考える。ただ、こうした作業は、「本書ではまだ両者の特徴を比較位置付けることで終わらざるをえない」(本書同ページ)とされているので、今後の展開をおおいに期待させていただきたいところである。

以上、ごく簡単に本書についての印象のみを述べさせてもらった。小川正先生はいうまでもなく、関西大学の教育学科の学生時代からのわたしの恩師である。その先生のご著書にたいして、もしかしてたいへん失礼な言い方をしてしまったのかもしれないが、先生と奥様のこれからのますますのご活躍をお祈りする次第である。

(山本冬彦)